

2016年9月4日(日)朝10:10～

聖霊降臨節第17、オリーブの会等

9月第1聖餐総員共同主日礼拝式説教

日本アライアンス庄原基督教会

## 説教題：小羊、さばきの封印を解く①

聖書：ヨハネの黙示録 6章1～8節

<口語訳>

新約聖書392頁

ヨハネの黙示録 6章1～8節

<新共同訳>

新約聖書459頁

ヨハネの黙示録 6章1～8節

<新改訳第3版>

新約聖書482～483頁

ヨハネの黙示6章1～8節<塚本訳>

新約聖書789～790頁

主題：主イエス様から賜った聖霊の導き

によって主の弟子たちは、主の名による  
神の罪からの救いを宣べ伝えたように、  
私たちも、福音を伝えたい。

序論；

- ◇ヨハネの黙示録は、1章1節、「イエス・キリストの黙示」とありますように、神の御子イエス・キリスト様が、天使を通して(1)、長老・使徒ヨハネに与えた「神の国到来の奥義」の黙示で、ローマ皇帝ドミティアヌス(81～96)時代に記録されたものと理解されています。
- ◇ヨハネ黙示録1章では、神の御子イエス・キリスト様の再臨信仰を持って生きるキリスト者への励ましのことばと黙示の神の御子イエス・キリスト様の愛の思いが啓示され、2章1～3章22節は、エペソ教会ほか7つのアジアの教会への手紙で、4章1～11節は、「天の玉座・御座」とその周辺の光景描写、4つの生き物の讚美、「天の玉座・御座」と24人の長老の讚美、5章1～14節は、「天の玉座・御座の父なる神の右手にある封印の巻物」を開封でき、その「巻物」を受取る屠られた仔羊(羔羊)礼拝と天の大讚美の描写。
- ◇ヨハネの黙示録6章1～8節は、「さばきの巻物」の開封、第1～4巻の封印が解かれる箇所です。

本論；

◇本日、ヨハネ黙示録第6章1～8節から主の使信に思い・心をとめます。

◆黙示録6章1～2節；ヨハネは、仔羊(羔羊)が巻物の第1の封印を解き、白馬が弓を持ち、冠をかぶった騎士の登場を見ました。

◇1～2節；塚本訳◆第1の封印—白馬[勝利]

「1 そして仔羊が七つの封印の(最初の)一つを開いた時、見ると、私は(玉座の傍にいる)四つの活物の一つが雷のような(大きな)声で「来い」と言うのを聞いた。

2 そして見ると、視よ、白い馬が顕れて、それに乗っている者は弓を持ち、冠が彼に与えられた。そして彼は勝ちつつまた勝たんとして出て行った」と、ヨハネは主の受取った巻物第1の開封の幻を啓示された。

◇1～2節；四つの活物の第1、獅子が「来い」と、雷鳴のような声で叫ぶと、「弓を持ち、冠が与えられた騎士が乗った白い馬」登場、「彼は勝ちつつまた勝たんとして出て行った」と解説のことばが添えられるのをヨハネは見ました。

- ⇒「**白い馬**」は、「**彼は勝ちつつまた勝たんとして出て行った**」との解説の通り、「**勝利**」を表徴するものです。
- ⇒「**弓を持ち、冠が与えられた騎士**」が、だれであるかが多様な解釈を呼んでいます。
- ⇒後の騎士たちの意味つけと勘案し、**OS師**が提示の「**戦争**」との立場で、これを理解して進めます。
- ⇒「**弓を持ち、冠が与えられた騎士と白い馬**」は、「**勝利**」を現わしていても、「**戦争の騎士**」が、示す通り、**神**に徹底して聴き従わず、罪にとどまりつづける者への厳しい裁きが「**戦争**」という形で臨むというのです。
- ⇒**ヨハネの黙示録**が、「**戦争**」を**神のさばき**として提示しているとも、言えるのです。
- ⇒確かに、「**戦争**」は、国と国、民族と民族などが対立する人間の愚かさが生み出すものですが、**神**は、「**戦争**」によって、「**神なき、人間中心の生き方**」に**神審判**を下しておられるのです。
- ⇒勿論、**ヨハネの黙示録**が、特定の**戦争**を指示しているわけではありません。
- ⇒**罪にとどまる生活**に対し、**神**は、**さばかれます**。

◆ 黙示録6章3～6節 ; ヨハネは、仔羊(羔羊)が巻物の第2と第3の封印を解き、赤馬と黒馬が剣を持ち、はかりをもった騎士の登場を見ました。

◇ 3～4節 ; 塚本訳 ◆ 第2の封印 — 赤馬 [戦争]

「3 また彼が第二の封印を開いた時、私は第二の活物が「来い」と言うのを聞いた。

4 すると赤い他の馬が出て来た。そしてそれに乗っている者に、地(上)から平和を奪い取ること、また(戦争と内乱とにて)互いに屠り合わせることを許された。そして大きな剣が彼に与えられた。

◇ 5～6節 ; 塚本訳 ◆ 第3の封印 — 黒馬 [飢饉]

「5 また彼が第三の封印を開いた時、私は第三の活物が「来い」と言うのを聞いた。そして見ると、視よ、黒い馬が顕れて、それに乗っている者は手に秤を持っていた。

6 そして私は、四つの活物の真中で声のようなものが(こう)言うのを聞いた、「小麦は一ケニックスで一デナリ、大麦は三ケニックスで一デナリ、油と葡萄酒を害してはならぬ。」と、ヨハネに巻物第2と3の開封の幻を啓示。

◇3～4節；四つの活物の第2、雄牛が「来い」と、雷鳴のような声で叫ぶと、「大きな剣が彼に与えられ、地(上)から平和を奪い取ること、また(戦争と内乱とにて)互いに屠り合わせることを許された騎士が乗った赤い馬」が登場するのをヨハネは見ました。

⇒ヨハネは、「赤い馬」に乗る騎士が、「剣が与えられ、平和を奪い取ること、(戦争と内乱とにて)互いに屠り合わせること」の「許される権能」を持つのをみました。

⇒OS師は、「内乱、内戦」を表徴していると、先の白馬の表徴と区別しておられます。

⇒同じ戦争でも、「内乱・内戦」で国家、民族、ある地域が、分断されているのを見ます。

◇5～6節；「秤を持つ騎士が乗る黒い馬が顕れ」、「小麦は一ケニックスで一デナリ、大麦は三ケニックスで一デナリ、油と葡萄酒を害してはならぬ」と、「四つの活物の真中で声」がしました。

⇒「黒い馬」は、「秤」に表徴される通り、「飢饉」によるさばきです。

⇒小麦、大麦の価格は、暴騰しているのです。

◆ 黙示録6章7～8節 ; ヨハネは、仔羊(羔羊)が巻物の第4の封印を解き、青ざめた馬が死を持ち、ハデスを従えた騎士の登場を見ました。

◇ 3～4節 ; 塚本訳 ◆ 第4の封印—青白馬[死]

「7 また彼が第四の封印を開いた時、私は第四の活物の「来い」と言う声を聞いた。

8 そして見ると、視よ、青ざめた馬が顕れて、それに乗っている者はその名を死という。そして陰府がこれに従っていた。彼らは地の四分の一に住む人々を、(あるいは)剣を以て、(あるいは)飢饉を以て、(あるいは)疫病を以て、(あるいは)また地の(野)獣によって殺す権威を与えられた」と、ヨハネに巻物第4の開封の幻を啓示された。

◇ 7～8節 ; 第四の活物の鷲は、「地の四分の一に住む人々を、(あるいは)剣を以て、(あるいは)飢饉を以て、(あるいは)疫病を以て、(あるいは)また地の(野)獣によって殺す権威を与えられた」、「その名を死」と呼ばれ、「陰府ハデスがこれに従う騎士が乗る青ざめた馬が顕れる」のを、ヨハネは見ました。

⇒「死」こそ、人間の最大のさばきです。

## 結論；

- ◇神は、変わらない愛と思いやりの神です。
- ◇ヨハネの黙示録は、1章1節、「イエス・キリストの黙示」とありますように、神の御子イエス・キリスト様が、天使を通して(1)、長老・使徒ヨハネに与えた「神の国到来の奥義」の黙示で、ローマ皇帝ドミティアヌス(81～96)時代に記録されたものと理解されています。
- ◇ヨハネ黙示録1章では、神の御子イエス・キリスト様の再臨信仰を持って生きるキリスト者への励ましのことばと黙示の神の御子イエス・キリスト様の愛の思いが啓示され、2章1～3章22節は、エペソ教会ほか7つのアジアの教会への手紙で、4章1～11節は、「天の玉座・御座」とその周辺の光景描写、4つの生き物の讚美、「天の玉座・御座」と24人の長老の讚美、5章1～14節は、「天の玉座・御座の父なる神の右手にある封印の巻物」を開封でき、その「巻物」を受取る屠られた仔羊(羔羊)礼拝と天の大讚美の描写。
- ◇ヨハネの黙示録6章1～8節は、「さばきの巻物、第1～4巻」の封印が解かれる箇所。



⇒**第1巻**は、白馬で、「**戦争**」、**第2巻**は、赤馬で「**内乱・内戦**」、**第3巻**は、黒馬で「**飢饉**」、**第4巻**は、青ざめた馬で「**死**」によるさばき宣告でした。

⇒これらの**神の終末のさばき**は、すでに地上で起こっていることではありますが、**ヨハネの黙示録**は、「**戦争、内戦、飢饉、死**」は、**神のさばき**であるとの認識を喚起しているのです。

⇒私たちも、**神信仰**に忠実に生きていても、地上で、肉体をもって生きている限り、これらの出来事に巻き込まれる危険性は回避できにくいのです。

⇒併し、**天の神の御国**に導かれるためには、「**戦争、内戦、飢饉、死**」などの**神のさばき**は、妨げにならないのです。

⇒罪のないお方でしたが、私たちの罪を贖い、**神の救い**へ導くために、「**十字架の死**」という最高の苦難を背負って下さったので、私たちも、**大患難**には耐えられないですが、今、肉体にあって背負う苦難には、**神**は耐える力を聖霊を通して、日々与えて下さるのです。

⇒**OS師**は、**神不信**こそ、**恐れるべきこと**と。

⇒以下は、**OS師の著書**から引用です。

一サタンの親分が三匹の子分たちに、「出て行って、手柄を立ててこい」と命じる。

しばらくすると、一匹の子分が飛んで帰って来て、「親分、ご褒美は、わたしのものです。

だって、一人のクリスチャンを重病の床に叩き込んできました。」

すると、さすが親分。

「間抜けめ。どじめ。それじゃ、かえってクリスチャンを立派にさせただけだ。見てみろ。

あのクリスチャンは、床の中で、

今まで以上に神の名を呼び、信仰専一になっているではないか。」

次いで帰って来た子分。

「親分、ご褒美は、わたしのものです。

わたしはたった一人のクリスチャンだなんて、ケチなことではなく、百人よ。

それも病気だなんて、生ぬるい仕掛けではなく、一挙に百人を船に乗せて沈没させて皆殺しにしたんですぜ。

ご褒美は、手前のもの。

これに対して、さすが親分。

「お前のほうが、もっとどじだ。

その百人のクリスチャンはそっくり天国へ行っちゃった。

クリスチャンを滅ぼしたのではなく、

天国へ送り込むというへまをやっちゃった。」

さて、三番目の子分は、なかなか帰って来ない。

一月たっても、二月たっても、いや一年、二年、三年、ようやく五年目になって、帰って来ました。

「いったい、どこをほっつき歩いていた。何をしてきた」

という親分に、この子分は答えたのです。

「はい、はい、実は私は、一人のクリスチャンを目がけました。

徐々に、徐々に、当人にも気づかれないように、ゆっくり、神から離し、そむかせていたんです。まず、集会中に居眠りさせました。

そして、次に、礼拝中にも居眠りしちゃったと、大声で言わせました。それから折々遅刻させ、

聖書を読むことを一度、二度と怠らせ、

祈りの時間を短くし、省かせるようにしました。

それも徐々に、徐々に。こうして、一年、二年、

三年. すっかり神から離させることに五年

かけた次第で。」  
これを聞いて、親分、膝を打ちならし、  
「でかしたぞ。お前こそ、本当にクリスチャンを  
滅ぼした！」  
とほめたとき。

一撃による滅びよりも、長きにわたる徐々の  
滅びの恐ろしさでした。

戦争による死、  
内乱による死、  
飢饉による死、

と並べて、ひっとすると、その悲劇度は、  
逆のように見えながら、実際は順序どおりだった  
のでは。＜中略＞

やがての時の飢饉の審判もさることながら、  
今日の霊的飢饉、胃の腑ならぬ、心の飢え死に  
に警戒を怠らぬよう。

＜OS著著作集Ⅱ 29～31頁＞

⇒**4つの生き物**が求めていますのは、**神と仔羊**  
**(羔羊)**への**礼拝、大讚美**であることを覚えたい  
と願います。

⇒**神のさばきの現実**には、**真摯に霊的心**を  
もって、**ひれ伏す姿勢**を保持したい。